

経済野話（原文） (1)経済史眼の必要

1. 「樹を見る者は森を見ず」と云い、「泰山に入って泰山を知らず」と云う詞がありますが、実際鹿を逐う事に夢中である従来歴史家は、足許に何が横たわっているのか、これを見逃しがちであったのではあるまいか。

私は青年の頃には、その時代に流行した西洋史を読んだ、ローマのシーザーが天下を取るのに非常に大きな借金をした事が記されていた、つまりシーザーは借金に依って天下を取ったのであった。

その当時、この事は唯一つの偉人の逸話として考えたが、今にして思うとシーザーは経済力の偉大さを利用して当時の人心を風靡したのである。

実際、彼は世人の考えているような戦争の上手な人ではなかったけれども、人心を収攬する事においては大きな人格上の力を持っていた。然しながらこの点もよく考えて見ると、彼の偉かった点は社会の底力となって、その奥深く流れるものを捉えた事である。

語を換えて言えば経済力の人心を支配する、その実体的な力を認めて之を甘く利用した点である。

ナポレオンは確かに世界の歴史を通じて戦争の上手な名将であった。然し何故に彼がロシア遠征に失敗したのか、彼の暗い悪い運命の糸口をあの一戦に作ったのか。これは一口に言えば経済上の援助が無かったからである。

当時のフランスのブルジョアが挙って反対的の行動に出たのみならず、経済上の援助を惜しんだからである。

彼はモスクウでは決して戦争に敗けたのでは無かった、むしろ到る所で戦争には勝ったのである。然るに遂にコルシカ島に追いやられたというのは、経済力というものの援助を得る事が今までのように充分で無かったからである。

2. 従来我国の歴史家は、あまり経済とか、通信とかいうものに就いては説き及んでいなかった、有名な日本外史だってそれは政治の歴史に非ざれば、戦争の歴史を叙説した、若し然らずとすれば英雄偉人の伝記である。

源平壇ノ浦の海戦は、何年何月である、その戦争は何処で行われた、その戦争には何万何千の兵隊が居った、大砲が幾つあった、その時の大将は誰と誰とであった、更に之を詳しく述べる人はその大将の生まれは何処の国であった事までを付け加える。

政治の歴史に於いても同様である。何の某が誰と結託した事とか、何れの主張に賛成者が多かった事とか、先ず通じて言えば戦争と政治の歴史の力説である。

成程戦争とか政治とかいうものは、人類の歴史に於いて重要な出来事には相違ない、重大な事件であろう。然しその戦争の年月日がどちらに違ってもその時の大将が何処の生まれであろうとも、またその時の兵隊の数が一桁違ってもそれが吾々の歴史にどれだけの必要があり、意義があるのでであろう、それは丁度桜は何月に開くかという問題と同じ事である。

内地では梅、桃、桜と二月から順次に咲くが、北海道では梅、桃、桜が五月に一度に咲くという比較論と同じ事である。どちらであっても宜しいのである、またどちらも事実である。

象という動物は、吾々の子供の時から巨大なものとして考えられて居たものである。今もし盲者がその鼻や足や尾だけを手さぐりしてどうしてその象の大きい事が判るであろうか。部分の研究は必要である、部分をはっきりと知悉する事は学問の研究の過程に於いて重要な事である。

然しここに一つの誤謬があるのであるまいか、部分は全体の部分である、部分を総合して全体を見る事に於いての一過程である、そこで初めて意義があるのではあるまいか。

歴史上の一つの事件、それは確かに研究に価する。然しそれはその社会生活の全体の一つの表れである、一つの事件に過ぎないのである。

その一つの表れのみを以て、全体を見逃がす事はどうしても間違いである。例えていえば英雄が社会を作るのか社会が英雄を作るのか。之に対し私は疑いもなく時代と社会が英雄を作るのである事を信ずる、従って英雄の伝記の歴史を以て、満足する事が出来ない。その時代と社会とを知らなければ本末を顛倒したものと考える。源を知らずに末を知っただけでは善くその何物たる事を知る事は出来ないではないか。

然しながら私は更にこう考える。その形を作った時代と社会とを考えただけでは未だ真にその時代の実体を突き止めたという事は出来ないと思う、何んとなればその時代、その社会に流れる一つのアンダーカレントがあるからであって、この潜在的に流れる根強い真の力を認めずに色々な議論をする事は、前述の本末顛倒論と同じように間違っていると思うのである。

ある史家はこのアンダーカレントを時代精神とか、時代の風潮という詞を以て説明して居る。然しながら私はこの点に就いても斯く考える。時代精神とか、時代の潮流とか云うけれどもその流れの一つ根源が存在すると信ずる。河に源があるが如く、その潮流には出発点がなければならぬ、流れの源が存在するのに違いないと思う。

抑々人類の歴史をその何千年の昔へ遡って考えて、衣食住という問題を離れて何処に生活の歴史があるであろうか。人類の歴史に於いて経済行為を離れて経済生活を除いて、何処にその歴史が考え得られよう。

私は思う、経済生活というものが真に人間を動かした力であって、人を動かすものは決して権力ではなくて経済力である。政治の歴史や戦争の歴史に於いて現れた人間の争いの歴史も畢竟（つまるどころ）この経済の力が人間の本能的に表れた一事例に過ぎないもので、総ての源は人類の生きんとする努力の根強い力を成す、この経済行為が形成して居るものであると信ずる。

人類の文化といい、善政悪政という、総てこれ等の歴史上の問題はその時代の経済観念を前提とせずして論議する事は不可である。少なくとも源を究めての議論ではないと思う。

3. 上古原始時代に於ける民族は、その自然の与えるままに総てを享樂した。故にこの時代に於いては物資を蓄積するという観念は少なく、従って現代の意味に於ける資本とか、金利とかいうようなものはなく、その経済組織は頗る簡単であった。

畢竟古代に於ける人類の経済生活は、自然の与える限度を標準とし、自然のままにその生活の資料を取り、そこに人類の繁殖を試みたのであった。

我国の歴史を繰り広げて見て、尤も著しく文化の栄えた時代は飛鳥朝、奈良朝の時代であった事に一致するであろう。実際この時代は單り美術史、芸術史の上から

のみでなく政治上に於いても比較的よく治まった時代で、日本が民族的に融和を終え王朝の基礎が確立した時であった。畢竟この時代は我国の黄金時代であったのである。

然し翻って考えて、何故にこの時代が斯く平和で然も芸術の百花繚乱時代を演出したかというに、それはこの時代に於ける経済社会に安定があったからである。

換言すればこの時代の経済組織は比較的余裕があって、衣食住の問題に追われる事が少なかったから国民は新しい外国の高い文化を自由に吸収する事が出来、また政治に対しても経済上の基礎があったから割合に不安を抱く必要が無かったのである。

奈良に大仏が出来たり、諸国に国分寺を創設したりその輪奐の美を尽くした偉大な建築や多くの不朽の彫刻品を残す事ので出来たのは結局、その時代の人々が衣食住に追われる事が無かったからで、その証拠には王朝の末には人口の増殖に因る、経済社会の行き詰まりのために世の中が乱れ出した事から考えても甚だ明白である。

なお王朝時代の時半に度々遷都の行われた事は、それは表面は政治上の理由から行われたものであるが、その実際上の理由はこの時代の経済上の実権を握って居った商工業者の希望に依って行われ、その勢力に依って左右せられた結果であって、この点に就いては既に一部の史学者の間に着眼せられ研究せられた所の如くである。

4. 源頼朝という人は、中々計数に明るい人であった。それで彼はよく通信連絡による団結の必要を認めていたのである。故に彼が伊豆に兵を挙げた時には、京都で義経が起こり、木曾で義仲が旗を挙げた、そして各の源氏は之に相響応した。

蓋し之は頼朝が平素から内密によく各地の源氏と連絡を取って居ったからで、この時代のような交通機関の不便な時に之を甘くやった事が彼の天下を取った所以であらう。

頼朝は鎌倉に幕府を開いてから、先ず各地の荘園を整理した。彼は名を去って実を取り、経済上の力が人間の心を支配する人情の機微を洞察して、茲に経済上の実

権を握って諸侯を統治するの策に出たのである。つまり彼が克く天下を治め、人心を治める事が出来たのは経済上の関係を根強く設けた事に因るのである。

5. 南北朝の戦争は我歴史を通じて悲憤と紅涙の物語である。花よりも軍書に悲しき歴史である。

然しながらその南風の競いはなかった原因は何処に在ったのであろうか。あれだけ南朝方には大義名分があり、その正統なる旗印があり然も楠正成とか新田義貞とか、北畠親房とか名将忠臣がかなり多く、その陣を堅めて居ったのに拘わらず、唯足利兄弟に敗れたのは何故であったか。

私は斯く思う、その敗因は色々と考える事が出来るであろうが、然しその一番の原因は南朝側が常に大義名分のみに拘泥して、人間の心の本当に動くものは何に因るかと言う事を考えなかったからである。

換言すれば南朝側に與した人々は皆誠忠の士で、一以て十に当たるだけの気概で奮戦したのであった。然し大声は俚耳に入らずで、その下に従う者には大義名分が充分に呑み込めず、むしろその時代の多数の武人共は自己に利益を以て誘ってくれりと北朝側に^{なび}靡いたので、足利方は常に大兵を擁し、多衆の勢を以て之に当たったが故に、南朝方は個人的には強くても大勢に^{たしな}押されて到る処に勢が^{たしな}窘められてしまったのである。

あの尊氏が京都で敗けて命からがら逃げのびて九州に走った時は、彼に従う兵士は数人に過ぎなかった。然るに彼が数年にして、十万とか二十万とか云う大兵を率いて京都に攻め上がって来たのは、実に彼が経済の人心を動かす、その人情の機微を捉え、利を以て誘ったからである。

北畠親房は南朝に於ける学者であり、またこの方面には相当の識見を有し、経済的方面から南朝の威信を高めんと試みた人であった。

然し惜しい事にはその説が充分行われない中に死んでしまったのである。畢竟南

朝方の敗れた事は我国史を読む者をして、何んとかして之に克たせたかった感じのするのであるが、社会の原動力たる経済的力に対し徹底的な信念を持った者が無く、尊氏の如く巧みに人心の機微を察し、多数の味方を得る事に努力しなかった事は遂に孀子の名を成さしむるの結果となったもので、返す返すも残念な事である。

「武士は食わねど高楊枝」という詞がある。世人往々之を以て徳川時代の武士気質の典型であるが如くに説明する。然し之は間違った見方で、それは経済思想の無い片意地な一武弁の詞であって、国の大策を按ずる為政者の考えでもなく、またこの詞がその時代を流れる根強い力でも無かったのである。

要するに経済力というものは、吾々人類の歴史が始まって以来今日に到る迄、各時代を通じて一貫した強い流であって、今までの史家が躍り出た役者のみに眼を注ぎ、その背景たる舞台を閑却し、更にその舞台を編成するに至った、潜在的力を雲煙過眼視したのは全く間違った事であって、踊る役者の巧拙やその生い立ちは、事の枝葉であって人類の真実の歴史とは大した関係も無い事である。